

# 馬の大動脈の寄生虫性結節性内膜肥厚

麻布獣医科大学病理学教室出題・第9回獣医病理研修会標本 No. 123



馬 (アングロ・アラブ) 性: ♂ (去勢), 年齢: 4 才, 毛色: 栗色, 飼育地: 千葉県, 部検: 1969年1月3日, 材料: 大動脈起始部及び胸大動脈, 固定: 10% フォルマリン液, 脱灰: Planku, Rychlo 法, 染色: H & E

臨床的事項: 1968年10月下旬発熱, 腺疫の診断の下に抗生物質並びにサルファ剤を投与するも下熱せず, 約1カ月後ようやく平熱に復したが, 経過中鼻粘膜の充血が注目された。12月下旬再び発熱, 貧血と腰萎症状がみられたが, 食欲は異常をみとめなかった。

1969年1月2日起立不能となり, 食思廃絶し, 排尿もみられず, 予後不良と判断され剖検に附された。馬伝染性貧血の検査結果は陰性であったというが, 殺時の血液所見 (附表) 中リンパ球の増加が注目された。

肉眼所見: 皮下織の出血, 膠様浸潤, 腎筋変性, 腹水, リンパ節の腫大, 小腸バイエル板腫脹, 脾濾胞の著明な腫大を伴う脾腫, 軽度のニクスク様肝, 慢性腎炎, 膀胱麻痺, 心筋梗塞, 扁桃腫大, 舌潰瘍, 大動脈病変と前腸間膜動脈の寄生性動脈瘤がみられた。標本を提出した大動脈の変化は大動脈弁基部に存在した血栓を伴う結節と胸大動脈の大豆大硬結節より成り, 共に剖面に於て石灰沈着を伴う紐状物がみとめられた。

組織所見: リンパ節病変, 心筋, 肝, 腎の病変は一連

の変化を有し, 生前検査で一応否定されていた馬伝染性貧血を疑わしめるものであった。提出標本の変化は内膜肥厚部の粥状物中に石灰化しつつある虫体崩壊物を含み多数の好酸球破砕物もみられ, 寄生性のものと考えられたが, 血栓を附着するものも, 然らざるものも殆んど同一の構成を示した。内膜変化と共に中膜壊死及び栄養血管の変性, 細胞浸潤も高度であった。尚, 粥状物中脂肪はその周囲にのみわずかに検出されたのみであった。

組織学的診断: 寄生虫性結節性内膜肥厚とすることで参加者の意見がほぼ一致していたが, 馬円虫症に於ける寄生性動脈瘤形成の初期変化とも考え得るものであろう。

写真はいずれも H & E 染色標本で, (1) はルーペ拡大, (2) は弱拡大で, 結節の組織学的構造のあらましを示す。殊に(2)では, 石灰沈着を伴う虫体遺残物と中膜壊死が明らかである。

## 【附表】殺時血液所見

赤血球数	752万/mm <sup>3</sup>	白血球像	
白血球数	47,900/mm <sup>3</sup>	好塩球	0%
好酸球数	9/mm <sup>3</sup>	好酸球	0%
Ht	36.5	好中球	6.5% 3.5%
H6	13.4g/dl	リンパ球	
グロス反応	1.0	単球	79.0%
ルゴール反応	+++	その他	5.0%
T.P	9.8		6.0%